（様式4）

令和　7　年　2　月　21　日

教　育　長　様

代表者	校 園 名：	大阪市立焼野小学校
	校園長名：	川辺　智久
	電　　話：	6912-6155
	事務職員名：	赤松　和音
申請者	校 園 名：	大阪市立焼野小学校
	職名・名前：	校長　川辺　智久
	電　　話：	6912-6155

研究コース	
Ａ　グループ研究Ａ	
校園コード（代表者校園の市費コード）	
701581	
選定番号	137

令和６年度　「がんばる先生支援」研究支援　報告書

◇令和５年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	Ａ　グループ研究Ａ	研究年数	継続研究（２年目）
2	研究テーマ	**情報を主体的に活用し、学びを深める子どもの育成 ～学びあい、伝えあい、深めあう社会科・生活科の授業づくりを通して～**			
3	研究目的	○社会科・生活科を中心として、子どもが情報を主体的に活用し、学びを深める活動を通して、情報活用能力を育む授業のあり方を構築する。 ・確かな情報活用能力を身に付けるようにするための社会科・生活科の単元構成や指導法のあり方を構築する。 ・教材・資料や学習環境を工夫し、子どもの学習意欲や課題意識を高める。 ・「学びあい」を重視した活動を取り入れ、子どもの思考力、判断力、表現力を高める。 ・ＩＣＴ機器を活用し、子どもにとってわかりやすく楽しく学べる授業を実践する。 ・確かな情報活用能力を育む授業づくりについて、外部講師に講演を依頼し、授業づくりの方向性についての示唆をいただく。 ・授業研究を通して教員の指導力向上を図るとともに、研究資料作成を通して研究の成果と課題をまとめ、研究報告会で全市向けに報告する。			
4	取り組んだ研究内容	・４・５月：昨年度の子どもの学力の課題をもとに、子どもに確かな情報活用能力を育むための研究計画を立案した。 ・６～２月：情報活用能力を高めるために、日々の授業の中で話し合いを通じて考えを深めたり広めたりする活動や、資料から読み取ったことをもとに自分の考えをもち、説明したり記述したりする活動を意図的に取り入れ情報活用能力の向上に取組むとともに、文章等で表現することに重点を置いた指導や活動を実施した。 ・６～２月：社会科・生活科授業の充実のため、独自の教材・資料・掲示物等を作成した。作成した教材や資料は、校務支援ＰＣの共有フォルダに格納し、全教員が活用できるようにした。 ・５月：学力向上支援チーム事業のスクールアドバイザー 藤尾治仁先生にご訪問いただき、社会科・生活科の授業改善の視点と具体策について、今後の方向性についての示唆をいただいた。 ・６・７・９月：学校全体の研究授業の折には、外部講師として大阪教育大学 特任教授 長谷川和弘 先生、大阪市教育センター 指導主事 鈴木良和 先生にご来校いただき、確かな情報活用能力を身に付けるようにするための授業改善の視点と具体策について、今後の方向性についての示唆をいただいた。 ・６月～11月：授業改善計画をもとに授業実践を行うとともに、他校の社会科・生活科及びＩＣＴを活用した授業や情報活用能力の育成を趣旨とした公開授業に参加し、自身の授業実践を改善する機会とした。 ・６月～２月：スクールアドバイザー及び外部講師から示唆をいただいた指導法や、他校の実践から取り入れた指導法により、授業実践を行った。この間に全教員が１回以上の研究授業を実施し、更なる指導法改善策を協議し、整理するとともに、スクールアドバイザーの指導を受けた。なお、スクールアドバイザーの先生には年間約20回ご訪問いただいた。 ・１月：学校アンケートを実施した。 ・１月：１年間の研究の成果と課題を研究紀要としてまとめた。 ・１月：小教研鶴見支部教員研究発表会にて、２年間の研究の実績を発表するとともに研究紀要を配付した。 ・２月：研究発表会を実施し、１年間の研究について報告し、参会者に研究紀要を配付した。当日は公開授業を実施し、参観者による研究協議を行った後、元大阪教育大学特任教授 長谷川和弘 先生に指導講評・助言をいただいた。 ・２月：研究推進委員会で今年度の研究の課題を整理し、今後の方向性を検討した。			
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。			
		日程	令和　7　年　2　月　3　日	参加者数	約　35　名
		場所	大阪市立焼野小学校　４年２組教室及び多目的室		
		備考			

6	成果・課題	大阪市教育振興基本計画に示されている、子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および教員の資質や指導力の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。
		【見込まれる成果１】 ☐ 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 ☑ 教員の資質や指導力の向上 全学年で日常的に言語力や情報活用能力を高める授業づくりに取組むとともに、児童が「わかった」「できた」を実感できるよう学習活動や板書、教材・教具等を工夫する。 ≪検証方法≫ 年度末の校内調査における「学校の勉強はよくわかる」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を60%以上にする。
		〔検証結果と考察〕 子どもが情報を主体的に活用し、学びを深める活動を通して、情報活用能力を育む授業のあり方を構築するために、社会科・生活科を中心に、全学年で授業づくりに取組むとともに、ＩＣＴ機器を活用した児童にとってわかりやすく、楽しく学べる授業を実践した。また、各学年の実態に応じて教材、掲示物等を作成・活用し、調べ、考える活動の重視、子どもの知的好奇心を喚起する教材選定、表現活動や話し合い活動の設定など、言語力や情報活用能力の育成に重点を置いた指導や活動に日常的に取組んだ。その結果、今年度末の校内アンケートの質問項目「学校の勉強はよくわかる」の項目において、児童の最も肯定的な回答の割合は58.0%であった。
		【見込まれる成果２】 ☑ 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 ☐ 教員の資質や指導力の向上 言語力や情報活用能力を豊かにするための学習環境を工夫することにより、子どもの学習への意欲や課題意識を高める。 ≪検証方法≫ 今年度の小学校学力経年調査の質問項目「社会科の勉強は好き」において子ども（３～６年生）の肯定的回答の割合を85%以上にする。
		〔検証結果と考察〕 日々の授業実践において、計画的に情報活用能力の基礎・基本を育てるための指導に取り組んだ。日常的に、各学年の実態に応じて、教科書や地図帳、副読本、資料集等を活用したことの他、学校の地域性や子どもの実態にあわせて身近な地域の教材を学習に取り入れたり、その状況に応じて教材を選定（作成）したりしながら、教材選定・作成の工夫を行った。さらに、実際に現地に行って取材したり、話を聞いたり、写真を撮ったりすることで、より有効な資料を作成するとともに、収集した資料を子どもの発達段階に合わせて子どもが一人で読み取ったり、子どもの気付きや考えの深まりにつなげたりすることができるように作成した。小学校学力経年調査では、「社会科の勉強が好き」の質問について、児童の肯定的回答の割合は、３年75.5%（市平均69.4%）、４年50.7%（市平均62.8%）、５年63.0%（市平均57.7%）、６年60.7%（市平均65.2%）であった。いずれの学年も目標を達成することができなかったが、３年生・５年生で市平均の数値を上回ることができた。
		【見込まれる成果３】 ☑ 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 ☐ 教員の資質や指導力の向上 「学び合い」を重視した活動を取り入れ、子どもの思考力、判断力、表現力を高めるようにする。また、ペアやグループ活動を通して、学び合う活動を定着させる。 ≪検証方法≫ 今年度の小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する子どもの割合を40%以上にする。
		〔検証結果と考察〕 ペア学習、グループ学習等、自分の考えと友達の考えを共有する場面を設定し、学習者用端末等を活用した調べ学習や発表などを行うことで、児童同士が学び合い、理解を深める姿が見られた。話し合い活動では、各学年の発達段階に応じて聞き方、話し方、考え方を指導した。例えば、発言を聞く際には自分の木考えの共通点や相違点を意識して聞くようにしたり、共感的に聞いたりする指導を行った。また、考えを述べる際には、事実と考えを明確に分けて発言できるように指導した。友だちの見方や考え方に触れることで、子ども一人一人が視点を広げ、自分自身の考えを変容させて、新たな学びを得ることができた。 小学校学力経年調査では、「話合い活動を通じて自分の考えを深めたり広げたりしている」の質問で児童の肯定的回答の割合は児童の最も肯定的回答の割合は、３年49.1%、４年35.8%（前年度39.3%）、５年55.6%（前年度79.2%）、６年44.6%（前年度53.6%）であった。３・５・６年で目標を達成することができた。

研究コース	Ａ　グループ研究Ａ	選定番号	137
代表校園	大阪市立焼野小学校	校園長名	川辺　智久

6	成果・課題	【見込まれる成果４】 ☐ 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 ☑ 教員の資質や指導力の向上 日々の教育活動を通してＩＣＴ機器を活用し、子どもにとってわかりやすく楽しく学べる授業を実践する。 ≪検証方法≫ 授業日において、児童の８割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。（ただし、学校行事等でＩＣＴ活用が適さない日を除く）
		〔検証結果と考察〕 授業日において、児童の８割以上が学習者用端末を活用した日数は、２月21日時点で４日（年間授業日の５%）で目標を達成することができなかった。 しかしながら、学習者用端末やプロジェクター、液晶ディスプレイ等のＩＣＴ機器を整備し、日常的に授業の中で学習内容やねらいに応じて活用することで、児童にとってわかりやすく、楽しく学べる授業を実践できた。

【研究全体を通した成果と課題】　研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。

1．新規研究（１年目）　※継続研究２年目以降は１年目の記載をコピーして貼付する

【成果】
・子どもに文章や図表等から必要な情報を見つけ出して自分の考えをもち、筋道を立てて説明したり記述したりする力が身に付きつつある。
・ペア学習やグループ学習を取り入れ、自分の考えと友達の考えを共有する場面が設定され、児童がお互いに学び合う姿が見られた。
・各教科の学習において日常的にＩＣＴ機器等を活用することによって、多様な情報を選択・活用する力が身に付いてきた。
・定期的に授業研究を行い、指導力の向上に取り組んだ結果、教員が児童一人一人が「わかった」「できた」を実感できる指導の工夫に日常的に取組む姿が見られた。
【課題】
・情報と情報との関係について理解し活用する力や、図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する力に課題が見られる。今後は、立場や意図に着目しながら資料を読み取ったり記述したりする能力を育む必要がある。

２．継続研究（２年目）　※継続研究３年目の場合は、２年目の記載をコピーして貼付する

【成果】
・問題解決的な流れを大切にし、単元構成と学習過程をそろえることで、主体的に教材に向き合い、問題を解決していく力や態度が子どもに身に付きつつある。
・資料・教材との出合わせ方を工夫することによって、「なぜだろう」「調べてみたい」という意欲を引き出すことができた。
・学び合い、伝え合い、深め合うための指導を工夫することで、得た情報を整理したり、分類したり、意味を考えたりしながら、個々の考えを広げ、深めることができた。
【課題】
・考える活動で子どもが十分に話し合いによって思考を深めることができる時間を確保するよう授業構成を工夫する。
・文章やグラフ、写真などから把握した事実を自分なりに整理し、図や表などを用いてまとめる指導の積み重ねを今後も継続していく。
・子どもが得た情報をもとに考えを深めることができるよう、考える場面での発問や指導者の問い返しを工夫する。

３．継続研究（３年目）

≪代表校園長の総評≫

1．新規研究（１年目）　※継続研究２年目以降は１年目の記載をコピーして貼付する

子どもが情報を適切に収集し、分析し、扱う力を身に付け、情報を適切に活用することで、問題解決能力や判断力、創造力が高まり、将来の社会で活躍するための基礎となると考える。しかしながら、情報と情報との関係について理解し活用する力や、図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する力に課題が見られる。すべての児童に情報を主体的に活用し、学びを深める力を身に付ける授業のあり方については、学校として確固たるものを掴むまでには至っていない。今後、児童の実態に応じたきめ細やかな指導を行うことで、得た情報を自分なりに解釈し、発信する経験を積むことによって、自ら考える力や、実生活への活用力を身に付けるための取組を継続したい。

２．継続研究（２年目）　※継続研究３年目の場合は、２年目の記載をコピーして貼付する

これまで本校では、主に情報を読み取り考察する力や、複数の条件をもとに記述する力に課題が見られた。しかしながら、今年度４月に実施した「全国学力・学習状況調査」の教科に関する調査では、国語科の「情報の扱い方」に関する内容で全国平均を大きく上回っており、情報と情報との関係について理解し活用する力に成果が見られた。また、算数科では、特に「データの活用」領域で全国平均を上回っており、グラフから必要な数値を読み取り、言葉と数を用いて記述する力に子どものがんばりが見られた。このような結果から、「情報活用能力の育成」をめざした授業実践の取組みの成果が少しずつ表れてきていることを実感している。しかしながら、すべての子どもが情報を主体的に活用し、学びを深める力を身に付けるまでには至っておらず、今後も１時間１時間の授業をより充実させるとともに、教員が「社会科・生活科の研究をやってよかった」と思える充実感と、社会科・生活科の授業づくりに対する自信がもてるよう、研究活動をさらに充実・深化させたいと考えている。

３．継続研究（３年目）